

キャンディードの「使徒」と化した佐渡裕 吉村溪（音楽評論）

Why“CANDIDE”？（なぜ、「キャンディード」なんだ？）

1989年12月、レナード・バーンスタインは舞台の上から聴衆にこう語りかけた。ロンドン・バービカンセンターにおける「キャンディード」上演（演奏会形式）のオープニングに先立ち、彼自身「靴の中の小石」と呼んでこだわり続けたこの作品への愛情と執着とをストレートに吐露した場面である。いっそ靴を脱ぎ、逆さにしてポロリと出してしまいたいのに、なかなか機会がなくて踏ん切りもつかず微妙な違和感に悩み続ける――バーンスタインにとって「キャンディード」は、そんな「厄介だが気になってしょうがない」存在だった。

ほとんど同時期に生み出され、あっという間に大ヒットを飛ばして映画化までされたブロードウェイ・ミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」に比べると、ミュージカルともオペラともオペレッタともつかない超ジャンルの内容ゆえに「キャンディード」



の真価が理解されるまでには然るべき時間が必要だった。思い切った改訂を施そうにも、稀代のマエストロとしての多忙さが邪魔をする。しかし、彼はとうとう行動に出た。人生の残り時間を測った上で、作曲者自身による最終決定版を残しておくべきだと考えたのだ。これは大英断であると同時に正解だった。彼はそのわずか10ヶ月後にこの世を去ってしまうのだから。そしてその一部始終を、アシスタントとして同行していた若き指揮者の卵がつぶさに見聞していた。言うまでもなく佐渡裕その人である。

佐渡はいう。「あのときのレニーは、リハーサルの前にも、楽屋に戻ってきてからも『あー、ここはこうじゃない』『いや待てよ、こっちの方がいい』とつぶやきながら、とにかく時間さえあれば鉛筆で楽譜に手を入れ続けていましたね。それはもう鬼気迫るというか、執念に近いものだったと思う」

バーンスタインが「キャンディード」にかけた凄まじいまでの執念は、このときから佐渡に乗り移ったようだ。キャリアの初期から、佐渡ほどこの作品に絶えざる情熱を傾けてきた指揮者はいない。PMF音楽祭で、抜粋版で、演奏会形式で、そして2001年には初の日本語による全曲舞台上演を次々に手がけてきた。そこには偉大なる師の遺志を継ぐと

いう意味合いに加え、「キャンディード」という作品が内包するメッセージの奥深さ、かけがえのなさ、魂が打ち震えるような感動とともに体験した者としての使命感に近いものがある。4月に来日したバーンスタインの長女ジェイミーは、そんな佐渡の姿を頼もしげに見守りながら「父が残りの人生でやりたかったことを、あなたはとても立派にやり遂げているわ。今回の『キャンディード』も、きっと素晴らしいものになる。私が今からワクワクしているんだもの」と語ってくれた。

さらに今回の上演にはもうひとつ、大きな魅力が備わっている。「キャンディード」の“使徒”と化した佐渡が手放しで支持するロバート・カーセンの演出である。このカナダ出身の鬼才は、作品の初演50周年を記念して制作されたパリ・シャトレ座のプロダクションで原作者ヴォルテールやバーンスタインの諷刺精神を現代に生き生きと甦らせることに成功し、ヨーロッパの口うるさい批評家たちを唸らせた。世界的に注目を集めたこの舞台上演がいち早く日本でも実現するのは、あらゆる音楽ファン、演劇ファンにとってこの上ない喜びとなることだろう。

「キャンディード」は極上のロード・ムービーでもある。無邪気・純真無垢・天真爛漫といったニュアンスの名前をもつ主人公の若者は、みずから望んだわけでもないのに世



界各国を遍歴しなければならない羽目に陥る。行く先々で災難に巻き込まれ、かと思えば人も羨むような幸運をつかみ、また生死の境目を彷徨ったあげく富を得て億万長者に……一見すると荒唐無稽な話の連続にも思えるが、実のところこれらはみな、人生という「旅の途中」に起こりうる偶発的なアクシデントの「わかりやすい極端な例の集大成」にすぎない。もちろん、少しばかりドラマティックな誇張はある。だが戦争も天変地異も差別も殺人も、不倫も詐欺も海難事故も、よく考えてみれば意外と我々の身近に隣接していることばかりではないか。ヴォルテールが原作小説「カンディード」を書いた約250年前と、人間の本質はちっとも変わっていない。そして「いつまで経っても懲りない人間という存在」が、一体最後に何と向き合うべきかという大命題に対するひとつの「解答例」を、この作品は時空を超えて示唆してくれるのである。

最後にもう一度振り返ってみよう。なぜ『今』、キャンディードなんだ!? ——答えは各自が劇場の中で見つけてほしい。

反骨の哲学者、作家



若くして 社交界の花形に

ヴォルテールが生きた18世紀のフラン

ス。それは、輝かしく栄えた“太陽王”ルイ14世と、フランス革命に散った“悲劇の王”ルイ16世の治世にはさまれて、豪華な宮廷文化が花開いた時代。厳しい思想統制の一方で、自由な思想が熱く燃えた時代だった。

ヴォルテール（本名フランソワ＝マリー・アルエ）は1694年のパリに生まれた。恵まれた少年時代を送った彼は、幼い頃から文学の才能を発揮し、やがて宮廷サロンに招かれる社交界詩人の花形になってゆく。

追放、投獄、数知れず…

フランソワは見栄っぱりで、けんかっ早かった。1717年には、時の国王ルイ15世の摂政オルレアン公を痛烈に批判する風刺詩を書いたかどでバステューに投獄される。約10年後の1726年にも、貴族のロアン公に侮辱されたことに腹を立てて決闘を申し込み、再びバステュー行きに。ほ

マエストロ佐渡が、「奇想天外な物語で、演出家泣かせの作品」と語る『キャンディード』。原作者ヴォルテール（1694-1778）の生き様もまた、自らの小説に負けず劣らず破天荒だった。物語と重なって見える、その波瀾万丈な生涯とは……？

どなくして国外追放の身となる。帰国後も、当局の許可を得ず『哲学書簡』（1734）を出版したため逮捕状が出されている。

ペンネームは「意地っぱり」!?

最初の刑期（1717-1718）を終え出獄した頃、若かりしフランソワは、ヴォルテールというペンネームを使うようになる。これは一説には、幼少時のあだ名「ヴォロンテール」（フランス語で「意地っぱり」の意）をもじったものだという。反骨精神にあふれた意地っぱりヴォルテールの誕生であった。

諸国遍歴を重ねた国際人

度重なる追放は、ヴォルテールを国際人に仕立て上げた。最初に追放された1726年には、英国に滞在。シェイクスピア劇に足を運び、見聞を広め、執筆をした。帰国後に英国滞在の成果とでも言うべき『哲学書簡』（1734）を発表、フランスを痛烈に批判する内容でひんしゅくを買ひ、逮捕状が出されると、今度はシャンパーニュ地方に逃れ10年間の田舎暮らし。これがまた実り多い生活で、学問に身を浸しながら、ヨーロッパ中あちこちを旅する。キャンディードには及ばずとも、なかなかの旅行家ぶりであった。

傑作小説「カンディード」

諸国を渡り歩いたヴォルテールは、後に宮廷に戻り、王室史料編纂官やアカデミー・フランセーズ会員にまで出世する。しかし根が短気で反抗的な彼に、宮廷詩人の生活が務まるはずもなかった。王や王妃にも疎まれ始めたヴォルテールは、苦い思いを抱えて宮廷を去ることになる。その後ベルリンやスイスに赴くも、夢みた啓蒙主義はかなわない。やがて彼は、あるひとつの結論にたどりつく。「人生は時に不条理なものだ。」そうして64才のときに書き上げたのが、傑作風刺小説『カンディード』であった。

宝くじで大もうけ ヴォルテールは金もうけの天才でもあった。ある時「すべての宝くじを買って100万リーブルもうかるのでは？」と宝くじ主催者のとんでもないミスに気付き、すべての宝くじを買って大金持ちになる。亡父から相続した資産も巧みな運用で増やすなど、実利の才にも長けていたよう。

得意技は「手紙」 朝起きたときから秘書に口述筆記させていたという逸話もあるほど、毎日熱心に手紙を書いていたヴォルテール。その数、生涯に4万通。テレビもインターネットもなかった時代、手紙は世論を作り上げる唯一の手段だった。無名の友人から王侯貴族にまで、書いて、書いて、書きまくり、時にはその力で、冤罪で処刑された人々の名誉をも晴らした。

英国の名優アレックス・ジェニングズ

今回の『キャンディード』には、ヴォルテールが自ら狂言回しとして登場する。演じるのは、イギリスの名優アレックス・ジェニングズ。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーで活躍し、オリビエ賞ほか数々の賞を受賞。最近では06年にスティーヴン・フリアーズ監督『クイーン』にチャールズ皇太子役で出演し絶賛を博した。芸達者なエンターテイナーぶりは必見！

